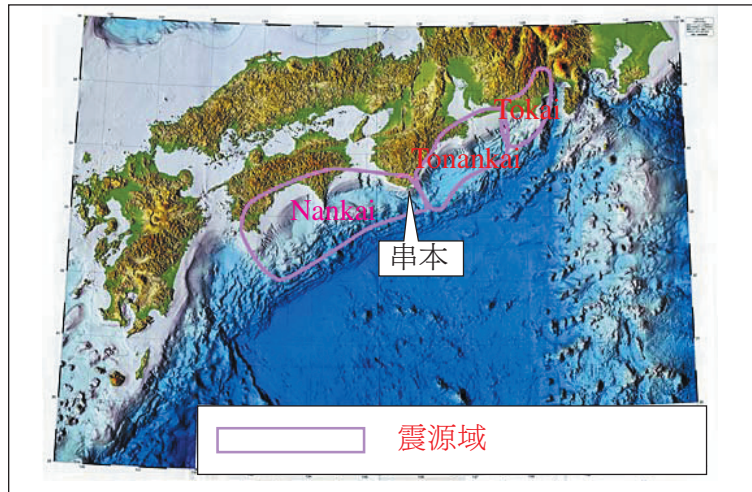


## 大水崎（おおみさき）区の自主防災活動（和歌山県串本町）

日本

### 説明

串本町大水崎区は、本州最南端潮岬の付け根の東側にあり、地区のほとんどが昭和43年の埋め立て造成によってできた地域で、人口は約690人、世帯数は約330世帯である。地区の東側全体が海に面し、土地のほとんどが海拔3m以下であるため、串本町内でも津波被害が最も心配される地域の一つである。



東海・東南海・南海地震帯

北海道南西沖地震で大きな津波被害を受けた奥尻町長の講演会が平成6年度（1994年度）に開催され、その講演会に参加した大水崎区民は、地形的に良く似た奥尻町の被害についての講演を聞いて不安を感じた。また、その講演の中で、「避難路をいくつも設けていたため被害が少なくて済んだ。」という話もあった。

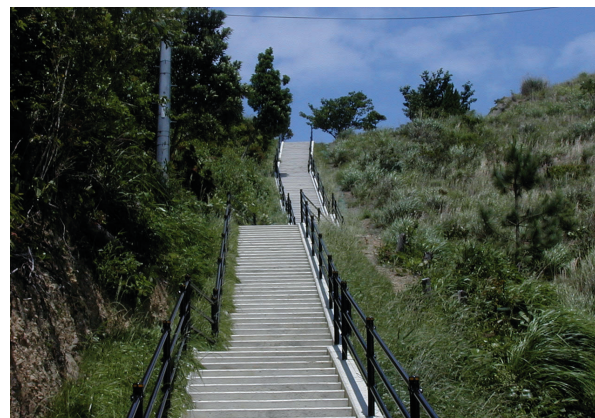
それまで町が指定していた高台への避難路を使うと避難するのに約15分かかり、もっと短時間で避難できる新しい避難路を作る必要性に迫られた。町に対し避難路建設の要望を続け、平成11年度（1999年度）には避難路整備実行委員会を結成し、更に要望を続けたが、地区と高台を結ぶ最短距離のルートにはJRの鉄道線路が存在し、避難路建設に大きな障害となった。町も要望を受けJRと協議を重ねたが、避難路建設に向けて事態がなかなか進まなかった。また、平成12年度（2000年度）には、和歌山県主催の「自主防災組織リーダー育成研修」に多くの住民が参加し、災害図上訓練（DIG：Disaster Imagination game）を行うことにより再度避難路の必要性を確認する機会もあった。



位置図

そのような状況の中、住民たちがボランティア作業により、湿地帯を横断する橋を2年がかりで建設した。それを視察し、住民の熱意に打たれた町長は、その先の斜面の部分の階段と通路の部分の町で費用をもって建設することとなり、住民と町が建設したそれぞれの区間が一続きになり、新しい避難路が完成した。

住民と行政がお互いに理解し合い、協力し合って、地域の防災力向上が図られている良い例である。



完成した避難経路

— 背景

1993年7月、北海道南西沖地震が発生し、奥尻島をはじめ渡島半島各地が津波に襲われ大被害を受けた。串本町も同島と似たような地形であることから、この災害を人ごとではないと思った町民は多く、串本町青年会議所が奥尻町長を招いて被災報告講演会を翌年12月に開催した。

この講演をきっかけに、自分たちの居住地のほとんどが海拔3メートル以下で津波の被害をまともに受ける危険があるにもかかわらず、短時間で高台に避難できる通路がないことを住民が認識するとともに、大きな危機感を持った。その結果、住民の発意と行動力により、避難路が作られることになった。

— (目標)

短時間に避難できる避難路の確保

— (期間)

ボランティア施工部分      2000～2001年  
町施工部分                      2002年  
計                                      3年

— (重要な活動行為)

- ・ 串本町青年会議所が催した北海道南西沖地震で大きな津波被害を受けた奥尻町長の被災報告講演会
- ・ 住民の防災に対する意識の向上・危機感、既存の避難路の見直し
- ・ 住民による避難路整備実行委員会（大水崎自主防災組織）の結成と活動
- ・ 関係者（町・JR）との協議
- ・ ボランティアによる避難路の建設
- ・ 町長の視察、町の協力支援

— (主な成果)

6分以内に避難できる新しい避難路の完成  
(平成15年度「防災まちづくり大賞総務大臣賞」受賞)  
(平成16年度「防災功労者内閣総理大臣表彰」受賞)

— (総予算・費用)

ボランティア施工部分      50万円  
町施工部分                      499万円  
計                                      549万円

— 連絡先 (海外向け)

山本 昭 主任研究員 アジア防災センター  
住 所：神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2 ひと未来館 5階  
電 話：+81 78 262 5540  
F A X：+81 78 262 5548  
電子メール：yamamoto@adrc.or.jp